

『補綴歯科治療による機能の改善』
—咬合バランスを診る—

○坂口 究
北海道大学大学院歯学研究院
口腔機能学分野 口腔機能補綴学教室

【抄録】

これまでの歯科臨床では、歯の欠損に伴う咀嚼障害を有する患者の口腔機能の評価、ならびに補綴歯科治療がこうした患者にもたらす口腔機能の改善の評価は、主に主観的評価に委ねられ、十分な評価がなされていませんでした。

近年、口腔機能、特に咀嚼機能を簡便かつ客観的に評価できる検査装置が開発され、臨床応用されています。この検査装置を用いることにより、歯の欠損に伴う咀嚼障害を有する患者の口腔機能を客観的に評価することが可能になりました。しかし、障害の程度に応じた咀嚼機能の回復程度に関する基準値を設定するまでには至っていません。治療前に基準値の推定ができれば、治療には量的目標が設定されることになります。

今回のシンポジウムでは、有床義歯による治療の咀嚼機能の評価に関する量的目標の設定を目指して、治療前後の咀嚼機能の評価と回復程度について、演者が日常臨床で行っている治療とその評価法について解説させていただきます。

『歯科技工士がいま考えること、そして行動すること』
～専門士・認定士の取得とその重要性～

○柿崎 税

北海道医療大学病院歯科技工部技工士長

【抄録】

近年、CAD/CAM の進歩によって、機能や審美性が良好で、天然歯と比較しても遜色のない高度な歯科補綴装置の製作が可能となった。このような新しい歯科技工技術を習得することで、経験の浅い歯科技工士でも精密で機能的、そして天然歯に限りなく近い審美的な補綴装置を製作できるようになったことは、歯科技工臨床上の大きな進化として喜ばしい限りである。しかし、歯科技工士は『技術』だけではなく、その裏づけとなる最新の歯科医学や生物学の基礎といった『知識』を獲得し、さらにそれらを普及させることを目指さなければならない。現在、歯科医師を主体とした専門的な歯科学会が数多くあるが、それらの学会の中には歯科技工士に称号を授与している学会がある。そして、学会発表や論文、または、積み重ねた臨床のケースプレゼンテーション試験などで認められて、認定技工士・専門士といった称号が与えられる制度がある。しかし、その認定に至るには様々な要件があり、そのハードルは高いと言える。今回は各学会で認定されている称号の取得要件と、取得の重要性についてお話しさせていただきたいと思います。

『関東で学んだ歯科技工士の魅力』
～学び、働き、遊ぶ、生き抜くヒント～

○高畑 寿也
Accordent.Lab (アコードメント・ラボ) 代表



【略歴等】

- 2009年 北海道歯科技術専門学校卒業後、群馬県の手ラボに就職し、保険技工の大量生産を経験する。
 - 2012年 (有)坂巻デンタル・ラボに就職、自費技工と対面技工を学ぶ。
 - 2014年 同社内にて開業し、個人経営を学ぶ。
 - 2018年 札幌市にてメタルフリー専門 Accordent.Lab を開設する。
 - 2019年 北海道若手技工士勉強会【ito】を立ち上げる。
- 現在に至る

【抄録】

私がこの仕事に就いた10年前、多くのラボが労働基準とはかけ離れた環境でした。長時間労働、低賃金で、私の周りもそれは例外ではありませんでした。経験10年以上の中堅技工士が、深夜まで働く姿を目の当たりにし、「自分もこれから10年、20年、もしくは退職するまで、この労働環境なのか?」と、悩みを抱えながら日々過ごしていた頃を思い出します。

今回は、「歯科技工士として働きながら、充実した生活を送るために、20代の間に必要な事」をメインに、お話させていただきます。

関東で、10年間働いてきた経験を踏まえて、何を学び、どう働き、遊ぶか。私自身のリアルな話が、皆様の生き抜くヒントになれば幸いです。